『漢字文化大観』[1)]
第16章「世界での痕跡－海外における漢字」
第３節「ベトナムにおける漢字」[2)]翻訳（前半）

巻　下　由紀子

【解題】

『汉字文化大观』（漢字文化大観）は、あらゆる側面から漢字の歴史をとらえた専門書として、５年の編集期間を経て1995年に中国の人民教育出版社から出版され、中国国内で注目を集めた。その後、初版以降の研究成果を反映した改訂版が2010年に出版された。本稿は改訂版の第16章第３節の一部を翻訳したものである。

漢字は中国の宝と呼ぶにふさわしいものであるが、古代より中国国内のみならず、日本や朝鮮半島、およびベトナムにおいても公式の文字として長期間に亘り使用されてきた歴史があり、これらの国々の文字や言語の発展に少なからぬ影響を及ぼしてきた。本節は、古代中国の豊富な文献資料をもとに、漢字と中国の文化、政治がベトナム社会にどのような影響を与え、それがベトナム語の語彙や発音にいかに反映されてきたかについて考察を行ったものである。中国で長年蓄積されてきた、漢字と東アジア地域の歴史や文化の関わりについての研究の一部を翻訳することにより、東アジア地域における漢字研究の更なる発展に貢献することが期待できる。

【解题】

《汉字文化大观》是一部全方面探讨汉字历史的专著，历经５年的编纂工作于1995年由中国人民教育出版社出版，受到中国国内各界的关注。其后对内容加以丰富补充，于2010年编辑发行了修订版，本文为修订版第16章第３节部分内容的日语译文。

汉字被称为中国的国家财富，自古以来不仅中国本国，日本、朝鲜以及越南等国都曾经长期以汉字为正式文字，并为这些国家的文字、语言的发展带来了巨大的影响。本节以丰富的古典文献资料为基础，探讨了汉字及中国文化、政治对越南社会产生了哪些的影响，以及这些影响是如何反映在越南语的词汇、发音等语言现象中的，从中可以进一步考察到中国悠久的汉字文化与东亚地区历史文化的相互关联。我们希望通过对这些研究成果的日文翻译，对促进整个东亚地区的汉字研究的发展作出贡献。

第３節　ベトナムにおける漢字

地続きに隣接するベトナムと中国の間には、長年に亘る密接な交流と親密な関係があり、古くから共通の歴史を有する。『史記』「南越列伝」には、秦代には五嶺からベトナム中部あたりまでの地域が「南越」（ナムベト）と呼ばれており、この地域の住民は「百越」に属していたが、当時はまだやや原始的で後進的な暮らしをしていたと記されている。紀元前214年に秦の始皇帝が南越を平定し、南海郡、桂林郡、象郡の三郡を置いた。そのうち、象郡は現在のベトナムの北部と中部を含む地域にあたる。ベトナムが西暦939年に独立してから最後の封建王朝が倒れた20世紀半ばに至るまでの長い歴史の中で、ベトナム語と中国語には常に深い結びつきがあった。

１．ベトナムにおける漢字の普及

ベトナムは、長期に亘りベトナム語と中国語の二つの言語を併用し、中国語を公用語、漢字を公用文字としていた。そのような背景のもとで生まれたのが現在にまで伝わる「漢越語」であり、それがさらに発展し、漢字をもとに作られたベトナム独自の民族文字が字喃である。現代のベトナム語は、それらの文字から大きく変化を遂げ、すでにラテン表音文字が「国字」として採用されている。しかし、ベトナム語が表音文字化しても、中国語の要素は借用語として今でもベトナム語に多く含まれており、統計ではベトナム語の語彙の60パーセント以上が中国語の借用語であるとされている。ベトナムの歴史において、漢字の伝播と使用は次の四つの時期に大別することができる。

郡県制・北属時代

『漢書』「地理誌」の注に「交趾（こうし）より會稽（かいけい）に至りて七八千里に百越の雑處、各々種姓有り。」[3]とある。交趾に暮らす駱越の民は百粤（越）の一派であり、多くは現在のベトナム北部と中部に居住していた。これまでの考察から、その周辺国および隣国の呉越、荊楚、南越、壮郷、蜀地などの国々の文化は、中原文化と同じ系統のものであったとされている。文化的な結びつきの根源を遡ると、駱越と中原の交流は早くも秦漢代以前から始まっていたことが明らかになっている。中国とベトナムの古典には、神農、顓、頊、堯、舜などに関連する記述の中に「南は交趾を撫（ぶ）す」[4]や「南は交趾に至る」[5]のような表現が数多く見られる。これらは、中国の戦国、春秋、西周、あるいは更に古い時代において、中国の中原地区と南方の交趾の間に、すでに直接的あるいは間接的な繋がりがあったことを示すものである。発掘された遺跡や出土品からも、中越両国の祖先の間に早い時期から交流があったことが窺える。陳修和は著書『越南古史及其民族文化研究』（国立雲南大学西南文化研究室、1943）の中で、ベトナムで発掘された五千年前の旧石器の中に「殷代の遺物に似たもの」があり、「蜀と越には共通の文化があった」と述べている。民族間の交流を通じ、自ずと言語面でも様々なつながりが生まれるものであるが、例えば古代の中原地区や、長江以南の百越地区のような多民族居住地区においては、地域の近隣民族間での言語交流がより

活発であったと考えられる。特に、秦漢による南越の開拓以降、中原地区の生産技術や礼儀作法などの文化と共に、漢字もベトナム一帯に広まった。『史記』「南越列伝」には、紀元前213年に秦の始皇帝が「已に天下を並せ、楊越を略定し、桂林・南海・海象郡を置き、謫を以て民を徙し、越と雑處せしむること十三歳。」[6]とある。秦の末期、南海郡尉の趙佗（Triệu Đà　前240または241～前137）[7]が天下の大混乱に乗じて桂林、象郡を攻撃して併呑し、独立して自らを王と称した。ベトナムの黎嵩（Lê Tung　1451～？）による『越鑑通考総論』には、趙佗を評して「武功　蠶叢を懾し、文教　象郡を振ふ。『詩』・『書』を以て國俗を化訓し、仁義を以て人心を固結す。」[8]と記されている。紀元前112年に漢の武帝が南越に九つの郡を設け、中央政府の直轄下に置いたが、そのうち交趾、九真、日南の三郡は、現在のベトナム北部と中部にあたる地域に位置していた。郡県制が確立され、中央政府と郡政府の関係が確固たるものになると、これらの地域にも自然と漢字が普及した。このような歴史的背景のもと、交趾、九真の両地域では漢字が公式の文字として扱われるようになった。しかし、当時、これらの地域はかなり発展が遅れており、『後漢書』「南蛮西南夷伝」にも「凡そ交阯の統ぶる所、郡縣を置くと雖も、而るに言語各々異なり、譯を重ねて乃ち通ず。…後に頗る中國の罪人を徙して、其の間に雑居せしめ、乃ち稍く言語を知り、漸く禮化せらる。」[9]とあり、礼儀の教育と漢語および漢字の普及も行政に課された重責であったことが窺える。『後漢書』「循吏傳」には「領南の華風、二守より始まる。」[8]とあるが、ここでの「二守」とは、当時大きな功績を挙げた錫光と任延の二人を指す。『後漢書』「南蛮西南夷傳」には「光武中興するや、錫光は交阯と爲り、任延は九真に守たり。是に於て其れに耕稼を教へ、制して冠履を爲る。初めて媒娉を設け、始めて姻娶を知る。學校を建立して、之を禮義に導く。」[9]と記されており、同様の記述はベトナム人の黎崩（レ・タック　Lê Tắc　1260年代～1340年代）による『安南志略』にも見られる。

交趾、九真では、郡が設置されたことで漢字が公式の文字として広まったが、中原地区との交流が次第に盛んになり、中原からの移民の流入が続く中で、行政管理機関は情報伝達、商業交易、軍事協調、講義の実施、教育振興などの事業を推進し、漢語と漢字の更なる普及に注力した。現存する資料には、それらの地域において、中国語や漢字がその頃までにはすでに確固たる地位を確立し、広く流布していたことが記されているが、中でも注目すべきは、当時のベトナム語がすでに漢字の借用語を取り入れていた点である。その証拠に、現代ベトナム語における漢字の借用語には、上古の漢字音が今でも使用されている。ただし、このような借用語の数はごくわずかであり、また体系的でもないことから、当時はまだ中国語と漢字伝来の初期段階であり、これらの語彙は断片的に民間で流布していたに過ぎず、ベトナム社会に及ぼす影響は限定的なものであったと考えられる。この時期にベトナム地域に伝わった漢語の借用語は、上古中国語借用語と呼ばれる。

中国の前漢末期から後漢初期は、ベトナムでは北属期と呼ばれる時代にあたる。この時期は中国文化が交趾地域に浸透する重要な時期でもあり、中国文化は間断なくベトナムの歴史に大きな影響を与え、漢語と漢字がベトナムにおいて更なる発展を遂げた。

後漢後期に、これらの地域の政治、経済、文化など各方面の発展に大きく貢献したのは、当時交趾地区の太守となった士燮（シー・ニエップ　Sĩ Nhiếp　137?～226）である。『三国史』「呉書・士燮編」では、陳国の袁徽と尚書令の筍氏に宛てた書簡の中で、士燮について「既に學問優博し、又た政に從ふに達す。大亂の中に處りて、一郡を保全す二十餘年。疆場事無き、民業を失はず。……官事小閑すれば、輙ち書傳を玩習す。『春秋左氏傳』尤も精微を簡練す。吾數以て問傳中の諸疑を咨る。皆師説有り、意思甚密なり。又た『尚書』、古今に兼通す。大義詳備なり。京師古今の學、是非忿爭すと聞き、今『左氏』、『尚書』の長義を條して之を上らんと欲す。」[10]と記されている。士燮は五経四書、百家諸子、政治、医学をベトナムの人々に教授するために交趾に学校を開設して教育を振興したが、これらの取り組みにより、中国語と漢字は文化の伝達や生産の向上及び社会の発展を促す上で欠かせない手段となり、より多くの場面で使われるようになった。明代の厳從簡（1529～没年不詳）による『殊域周咨録』には、「舊志稱……時に刺史有り、名は仕變、乃ち初めて學を開け、中夏の經傳を教取し、音義を翻譯し、本國人を教へ、始めて習學の業を知る。然るに中夏ならば則ち喉聲を說き、本國舌聲を話す。字と中華と同じく、而して音同じくせず。」[8]とある。士燮は後漢および呉の時代の交趾の太守に過ぎない人物ではあったが、優れた政治手腕を持っていただけでなく、学を修めてふさわしい統治を行ったため、ベトナム人は尊敬を込めて彼を「南交学祖」と呼び、ベトナム封建史の研究者からは帝王と称されている。黎嵩による『越鑑通考総論』には、士燮を称えて「士王　魯國の風流を習ひ、學問博洽、謙虚下士、國俗を化するに『詩』・『書』を以てし、人心を淑くするに禮樂を以てす。國を治むる四十年を踰へ、境内　事無し。」[7]と記されている。

後漢末期になると中原地域は政情不安に陥ったが、交趾周辺は政情が比較的安定していたため、内地の漢族の民や封建制における士大夫（知識層）などが続々と交趾周辺に逃れてきた。その中には程秉、蒯綜、許靖、許慈、劉巴などの著名な士大夫や学者もおり、この地域に定住するものもいた。彼らの多くは交趾で学校を興して生徒を集めて経書を伝授し、書物を翻訳したり、書を著すことで中国の文化や礼儀作法を地域に広めた。『三国史』「呉書・虞翻傳」には「翻を交州に徙す。罪放に處ると雖も、而るに講學倦まず。門徒常に數百人。又た『老子』・『論語』・『國語』訓註を爲る。皆世に傳ふ。」[10]とある。

隋、唐の時代になると、中国の封建王朝は交趾にも科挙の制度を取り入れ、現地で儒生の官吏を育成した。特に、唐朝は安南に学校を開き、文化と教育を振興して儒教・道教・仏教を広め、また隋の制度を継承し、進士や明経などの科挙試験を通じて多様な人材を集めた。唐の武宗（840～846在位）は会昌五年（845）に嶺南、桂府、福建などの地域と同様に、安南からも進士と明経を毎年選抜して長安に派遣することを定め、朝廷はそのために安南に南選使を置き、安南人が安南や朝廷で官職に就くこととした。特別な事例として、『新唐書』第一五二巻「姜公輔傳」に、越人の姜公輔（クォン・コン・フ　Khương Công Phụ　730または731～805）が科挙試験を受けて進士となり、唐の徳宗（779～805在位）の時代に宰相にまで上り詰めたことが記されている。科挙制度の普及により、これらの土地でも「儒士」と呼ばれる漢字に精通した儒生や士大夫が登

場し、漢字の伝播において重要な役割を果たした。儒学を拠り所とする中国文化が広く普及し、政治、経済、文化の発展にともない漢字が交趾地区に深く根付くと、それまでは士大夫層や官界のみで使用されていた漢字が民間にも広まった。その後も漢字はそれらの地区に定着し、次第に正式な文字として扱われるようになっていった。阮朝嗣徳（トゥドゥック　Tự Đức　1848～1883在位）はかつて、「我が越国には文明があり、光を賜ったのち、おおよそ上は朝廷から下は村まで、官から民に至るまで、冠婚葬祭、理数、医学などのあらゆる分野において文字を使用しない者はいない」と述べている。（冬松『漢文化與越南文化』、『遠東日報』1971年３月４日）

この時期、交趾地区では、ベトナム語と中国語の二つの言語と、一つの文字、つまり漢字が使われており、当時のベトナム語には多くの古典中国語の語彙が取り入れられていた。現代ベトナム語の中国語の借用語の多くは、この時期から使われ始めたものであるとされている。そのような借用語は数多くあり、また幅広い様々な事がらを表すために使われており、また非常に体系的でもある。例えば、封建制度の支配関係を表す語句である「主」「奴」「税」「納貢」「服役」「租息」「没収」や、家族関係を表す語句である「祖先」「叔」「伯」「姑」「姨」「舅舅」「家譜」「宗祠」などのほか、政治に関する「君」「臣」「公」「侯」「官」「民」「忠」「孝」「節」「義」などの語句はいずれもこの時期にベトナム語に取り入れられたものであり、これらの語句の発音は現代でも隋代の「切韵」の音と体系的かつ厳密に対応している。

ベトナム独立時代

呉権（グォ・クエン　Ngô Quyền　898～944）は、939年に南漢の軍を破ると自ら王と称し、ベトナム北部における最初の独立政権となる呉朝（Nhà Ngô 939～963[11]）を樹立した。開宝六年（973）には丁部領（ディン・ボリン　Đinh Bộ Lĩnh　924～979）が宋の太祖によって交趾郡王に封じられ、安南は正式に宋朝の従属国となった。その後、19世紀後半にフランスの植民地となるまで、ベトナムの封建王朝は中国の王朝と常に藩属国と宗主国の関係にあった。呉朝独立以降の千年あまりの間、ベトナムの諸王朝では「官職制度や朝廷儀式、礼節と音楽、刑法、ひいては風俗文化や文字と筆記、衣服の規則から科挙の学校に至るまで」全て、中国の王朝を模した様式が取り入れられていた。（厳従簡『殊域周咨録』より）また、歴代の王朝は儒教を尊び、科挙試験によって優秀な人材を選抜する手法を継承した。1070年には李朝（Nhà Lý　1010～1225）の聖宗（李公蘊　リ・コン・ウアン　Thánh Tông　1054～1072在位）が昇龍城（昇龍（タンロン　Thăng Long）は現在のハノイ）に大廟を建設して周公と孔子を祭った。また、李朝時代の1075年には科挙試験が実施され、儒生の中から選ばれた者が入廷して官職に就いた。漢字と儒学を基礎とする科挙制度が行われていたことから、儒生たちは科挙試験に合格して出世コースを歩むために競ってそれらを学んだが、それが儒学と漢字の普及に拍車をかけることとなった。科挙制度では全ての名詞が漢字で表記されていたが、その中には今でも使われているものも多く見られる。例えば、現在のベトナムの学位制度において、学位の名称には科挙時代の成績順位を表す名詞が用いられており、高校を卒業したものは「秀才」、大学は「挙人」、修士は「副進士」、博

士は「進士」と呼ばれている。李朝に続く陳朝（Nhà Trần　1225～1400）の時代にも封建制度の支配者層が儒教を重んじ、科挙制度が推進された。1076年に李仁宗（李乾德　Lý Càn Đức　1072～1127在位）によって大廟に国子監が建立されたが、陳太宗（チャン・タィン・トン　Trần Thái Tông　1225～1258在位）は建中二十八年（1253）に国子監を国学院と改め、孔子、周公、亜聖（孟子）の像を祀り、七十二賢人の絵画を献上した。また、天下の儒学者たちに国学院に参詣する勅旨を出し、四書五経を講じ、科挙を実施して多くの知識人を採用した。陳順宗（Trần Thuận Tông　1388～1398在位）の時代の光泰十年（1397）５月の詔書には「国学の制已に備ひ、而して州県尚ほ缺く。其れ何を以て民の道を廣化するか。其れ山南、京北、海東の諸路府州をして、各々学官を置かせしめ、教授一員、賜田して差有り、大府州大に十五畝、中に十二畝、小に十畝、以て本学の用に供ふ。路官　学官を督、生徒を教訓し、才藝と成さしむ。歳末毎には則ち秀者を選び、朝に貢む。朕、將に親ら試みて之を擢せんとす。」[10]とある。（潘清簡ほか『越史通鑑網目』巻十一）1484年には黎聖宗（レ・タイントン　Lê Thánh Tông　1460～1497在位）が昇龍の廟に進士を称えて記念碑を立てた。鄭克孟の『越南進士題名碑文』（越南教育出版社、2006年）には、ベトナムではこれまでに大小様々な進士碑が137基見つかっているが、これらはベトナム全土の四大文廟に分けて祀られているとある。内訳は、順化（フエ　Huế）の文廟に34基、北寧（バクニン　Bắc Ninh）の文廟に12基、興安（フンイエン　Hưng Yên）の文廟に９基、河内（ハノイ　Hà Nội）の文廟、つまり国子監には最も多い82基である。河内の文廟だけでも、黎聖宗が最初の進士碑を建設してから阮氏の西山朝（Nhà Tây Sơn　1788～1802）に至るまでの期間における千人あまりの進士合格者たちの名前が石碑に刻まれていることから、当時の社会で儒生がすでにかなりの影響力を有していたことが窺える。

当時のベトナムの王朝支配者が漢文化を重視していたことから、科挙の制度化と法整備の進展に伴い、中国語と漢字はベトナム社会にますます大きな影響を与え、より一層社会に浸透していった。ベトナムの封建王朝は、中国語を官僚語、漢字を官僚文字とし、民間で宗教活動などに従事する際の正式な言語および文字であるとも定めた。ベトナムは13世紀に至るまで自国の文字を持たなかったことから、それまでは政令の公布や思想の普及、情報の伝達などには漢字を用いるしかなく、上は官僚が行う政令の告示から、下は書状や家族間の手紙のやり取りに至るまで、あらゆる文書に漢字が使われていた。士大夫や儒生階級の者は漢字を使って詩を書き、書物を記して論じ、農村で私塾を開いて漢字と漢学を教えた。特に、李王朝の時代に木版印刷が登場すると、様々な漢字の書物が印刷、発行され、漢字の影響はより大きくなり、また広範囲に及んだ。このようにして漢字は政府の組織から地方の町や農村にまで広く普及し、統治者や士大夫だけでなく、民衆も使用する文字となった。その後、ベトナムの王朝支配者が南に向かって国土を拡大すると、漢字と漢学の影響も現在のベトナム全土にまで及んだ。この時期にベトナムの古典文学は急速に発展し、特に漢字による著作や詩が数多く生み出され、ベトナム民族の発展と多様化に大きく貢献した。11世紀以降、ベトナムの文壇には著名な人物が登場し、名高い文章や名著が記された。例えば李常傑（リ・トゥオーン・キエット　Lý Thường Kiệt　1019～1105）の『南国山

河』、13世紀の陳世法（チャン・テ・ファップ　Trần Thế Pháp　生没年不詳）の『嶺南摭怪』、陳國峻（チャン・クオック・トアン　Trần Quốc Tuấn　1228～1300）の『檄将士文』および『兵法要略』、李済川（リ・テ・スエン　Lý Tế Xuyên　生没年不詳）の『粤甸幽灵集』、阮廌（グン・チャイ　Nguyễn Trãi　1380～1442）の『平呉大誥』、『蘭山実録』、『軍中詞命集』、『抑齋遺集』、黎文休（レ・バン・キウ　Lê Văn Hưu　1230～1322）の『大越史記』などがある。黎聖宗は、在位中の1495年に騒壇会を開いて自ら主宰者となり、28人の近臣を騒壇二十八宿に封じた。君主と臣下の間のやり取りは詩文や唱和で行われ、それをもとに『瓊苑九歌』、『春雲詩集』、『珠璣勝賞詩集』などの詩集が編纂された。黎聖宗はほかにも、在位期間中に『洪德法典』を編纂し、呉士連に『大越史記全書』の監修を命じた。その後も阮秉謙（グェン・ビン・キエム　Nguyễn Bỉnh Khiêm　1491～1585）の『傳奇漫録』、鄧陳琨（ダン・チャン・コンン　Đặng Trần Côn　1710～1745）の『征婦吟曲』、黎貴惇（レ・クイ・ドン　Lê Quý Đôn　1726～1783）の『見聞小録』、阮德達（グェン・ドゥック・ダット　Nguyễn Đức Đạt　1825～1887）の『南山叢話』、19世紀初頭の呉三兄弟（呉時志・呉時悠・呉時任）による『皇黎一統志』（または『安南一統志』）など、後のベトナム文壇に大きな影響を与えた作品がこの時期に生まれた。この時期の漢学作品は数が多いだけではなく、内容も古典の研究から歴史や地理の編纂、古典の解釈から詩文の創作まで多岐にわたり、政治、経済、哲学、文学、歴史、地理、宗教、兵法などあらゆる分野を網羅している。また、その中には優れた文学作品や貴重な歴史的な文献もあり、ベトナム民族文化の重要な遺産、財産となっている。これは、漢学と漢字が当時のベトナム社会にいかに大きな影響を与え、社会的な地位を確立していたかを示唆するものである。そのため、歴史上の長い期間、ベトナム人は漢字を自分たちの民族の文字と捉え、「自国の文字（chưa）」と呼んでいたのである。

この時期に字喃（チュノム）が作られたことは、ベトナムの言語文化史において注目すべき重要な意味を持つと言える。字喃とは、表音の部分と表意の部分を併せ持つベトナムの文字であり、漢字をもとに作られた方形文字である。古代漢字はベトナムの公式文字であったが、字喃は六書に照らし合わせ、漢字をもとに創作されたものであり、実際にはベトナム本土における中国語とベトナム語の音を当て字のように発音する文字である。「喃」という文字は漢字の「南」がベトナム化したものであり、ベトナム語では「nôm」と発音し、「通俗的で分かりやすい」という意味を持つ。ベトナム人は当初、字喃は庶民が使う俗語を書き表すための文字であると捉え、正式な漢字と区別していたと考えられる。昔のベトナム人は漢字を「儒字」と呼んで尊んだが、社交の道具である漢字ではベトナムの言語を完全に記述することができない場合も多く、そのような点を補うために新たに文字が作られた。これが字喃誕生の裏の事情である。史料には、12世紀ごろには地名や郷、村の名前が字喃で記されており、また、民衆も契約書や碑文に人名や地名を書いたり彫ったりする際には字喃を用いていたと記されている。これらのことから、字喃が広く使われるようになったのは李朝以降のことであり、字形の構造も徐々に統一されるなど、改善が重ねられたことが窺える。それまでにも、ベトナムの人名や地名のうち、漢字で表記することができないものについては、同じ音や類似した音の漢字を当て書きしたり、新たに漢字を造り出して

表記することがあったが、これが早い時期に字喃が作られた理由の一つであると考えられる。統計によると、ハノイ社会科学図書館に収蔵されている２万余りの碑文の拓本のうち、1200基には字喃が刻まれており、その多くが人名や地名を記すためのものであるとされている。例えば、一部の文献資料に記されているフランス人漢学者のアンリ・マスペロ（Henri Maspero　馬伯樂　1883～1945）がベトナムの寧平（ニンビン　Ninh Bình）省で発見した戸城山の石碑（*Etudes sur la phonétique historique de la langue annamite. Les initiales*、BEFEO 第12巻、1912年、ただし、文中で触れられている石碑は未発見）に刻まれていた約20文字の字喃は、全て村の名前を記したものであったとされている。ほかにも、李高宗（リ・カオ・トン　Lý Cao Tông　1175～1210在位）時代の1210年にベトナムの永富省安浪県塔廟寺に建てられた「報恩禅寺碑記」は、現存する碑文の中で最も多くの字喃を完全な形で残したものの一つであるとされており、碑文の拓本はベトナム社会科学図書館に保管されている。碑文には、漢字の間に混在する24の異なる字喃が見つかっており、そのうちの17文字は人名と地名を表すために使われている。その17の字喃の構造について見てみると、13個は仮借法を用いたものであり、例えば、幡（phướn）、翰（hãp）、山（sơn）、豸（chạy）、咸（hàm）、皂（tạo）、来（lai）、炎（viêm）、越（viêt）、穏（ổn）、抛（phao）などがある。また４個は形声法によるものであり、**涕**（bơi）、**紶**（chai）、**坳**（nhe）、滞（đái）がそれにあたる。更に歴史を遡ると、『大越史記全集』には、968年に丁先皇（丁部領）が即位すると、国号を字喃で記し「大瞿越」とした、と記されている。また、『欽定越史前編』には、唐の徳宗貞元七年（791）四月に兵を興して安南都護府を占領した馮興（フゥン・フン　Phùng Hưng　?～791）について、彼の死後は長子の馮安（フゥン・アン　Phùng An　生没年不詳）が都府君となったが、民衆は亡き馮興を称えて「布蓋大王」と呼んだと記されている。この「布蓋大王」は字喃と漢字が混ざり合った称号であり、「布蓋（Bố Cái）」の二文字は字喃、「大王」は漢字である。この称号は、今のところ、ベトナムの文献に見られる尊称として使われている字喃のうち最も古いものであるとされている。ベトナムの歴史文献に散見される、初期の字喃に関するこれらの細々とした断片的な記録は、当時の字喃がまだ発展の初期段階にあったことを表している。その後、字喃は実用化の過程で発展を遂げることになるが、字喃を用いて洗練された文章を記した例として挙げられるのが、13世紀後半のベトナムの文献に見られる、陳王朝の阮詮（Nguyễn Thuyên　生没年不詳）が字喃で鰐魚祭文を記したという記録である。『大越史前編』と『欽定越史鑑』では、壬午年（陳仁宗紹宝四年、1282）の秋のある日、鰐が濾江に現れたが、皇帝が刑部尚書の阮詮に文を投げ入れるように命じたところ鰐は自ら去り、皇帝はこの出来事を韓愈になぞらえ、阮詮に韓という姓を与えたとされている。阮詮はベトナム語の詩も残しているが、人々が自国語で詩を書くようになったのもこの頃からである。前述の「韓の姓を与える」とは、中国唐朝の韓愈が鰐魚文を書いたという故事から、陳仁宗（チャン・ニャン・トン　Trần Nhân Tông　1278～1308在位）が阮詮に韓の姓を与えたということであり、当時のベトナム王朝が中国文化を模し、またそれを受け継いで阮詮に格別の恩恵を与え、同時に阮詮が字喃で鰐魚祭文を書くことをベトナム王朝として認めたことを表すものである。これ以降、字喃は更に発展して普

及し、字喃を使って文章を書くことはもはや特別なことではなくなり、例えば、朱文安（または朱安）（チュ・ヴァン・アン　Chu Văn An　?～1370）の『国語詩集』、胡季犛（ホー・クイ・リー　Hồ Quý Ly　1336～1407）が翻訳した『書経』の「無逸」編や、『詩経』をベトナム語で皇帝と妃に講釈したものなどが字喃で記された。初期の字喃の名作には他にも、黎聖宗の『洪德国音詩集』、阮詮の『国音詩集』、阮秉謙の『白雲国語詩』、作者不明のものとしては『王嬙傳』、『林泉奇遇』、『蘇公奉使傳』、17世紀末に書かれた初の字喃の歴史詩史『天南語録』、同じく作者不明の『新編傳奇漫録增加補解音集注』などがある。18世紀から19世紀にかけて字喃は黄金期を迎え、字喃文学も目覚ましい発展を遂げ、ベトナム文学史に名を残す多くの作品が生まれた。その中には段氏点（ドァン・ティ・ディエム　Đoàn Thị Điểm　1705～1748）の『征婦吟曲』、阮嘉韶（グェン・ザ・ティエウ　Nguyễn Gia Thiều　1741～1798）の『宮怨吟曲』、阮輝似の『花箋伝』、阮廷炤（グェン・ディン・チェウ　Nguyễn Đình Chiểu　1822～1888）の『蓼雲仙人』、19世紀初めの女性詩人胡春香（ホー・スァン・フォン　Hồ Xuân Hương　1772～1822）による『春香詩集』、阮攸（ グェン・ズー　Nguyễn Du　1766～1820）の『金雲翹傳』などがある。ハノイ社会科学図書館には1100冊あまりの様々な字喃書籍が収蔵されているが、これらの字喃で書かれた文学作品と文献はベトナム文化の貴重な財産となっている。

この時期、ベトナムでは二種類の言語と文字が使われていた。つまりベトナム語と中国語、字喃と漢字である。ただし、すべての時期においてベトナムの正式な公用文字として使われていたのは漢字であった。当時、字喃はすでに日々進化を遂げ、社会生活の様々な分野で使われることも増えたが、特に文学創作において益々大きな役割を果たすようになっていた。とはいえ、当時のベトナムの支配者層が字喃に対して一種の偏見を抱いていたことから、字喃は不当な扱いを受けており、また字喃そのものが持つ弱点故に、歴代のベトナム統治者たちによって公文書に用いられることはなく、排斥や使用制限の憂き目に遭うこともあった。統治者の中には字喃を用いた者もいたが、その場合でも多くの場合、字喃は補助的な役割を与えられていたに過ぎず、人名、地名、物の名前を記す際や、文学の創作活動の際にのみ使われていた。例外として、陳王朝の支配者階級が、民衆に伝達するため、朝廷が下達する中国語で書かれた詔書の公文書に字喃で注釈を加えていた時期がある。『大越史記全書』には、陳仁宗時代の重興四年（1288）に「帝諭、行遣司と翰林院と交好する故事。凡そ德音を宣(の)べば、則ち翰林預め詔藁を行遣に送り、先に肆習せしむ。宣読の時に至り、兼ねて音義を講じ、凡庶をして易曉せしむる者」[10]とある。歴代のベトナム統治者の中で、僅かに15世紀の胡季犛（1400～1401在位）や西山王朝の光中帝（クァン・チュン　Quang Trung　1788～1792在位）などが字喃で敕、詔、旨などの朝廷の公文書を記したが、さりとて漢字の地位に影響を及ぼしたり、その地位を脅やかすには至らなかった。その原因の一つには、字喃は漢字を基に発達したものであり、字喃を習得するには、まず漢字を学ばなければならなかったことがあると考えられる。実際、ほとんどすべての字喃文学の作家は、漢学と漢字に精通していた。18世紀末から19世紀初めにかけて活躍したベトナムの文豪阮攸は、名高い詩集『金雲翹傳』によってベトナム文壇で名を揚げ、また多くの漢詩を収めた彼の詩集『清軒詩

集』、『南中雑吟』、『北行雑録』などは、ベトナムの古典作品に大きな影響を及ぼしたものとして知られている。下の図に記されている漢詩は阮攸による作品である。

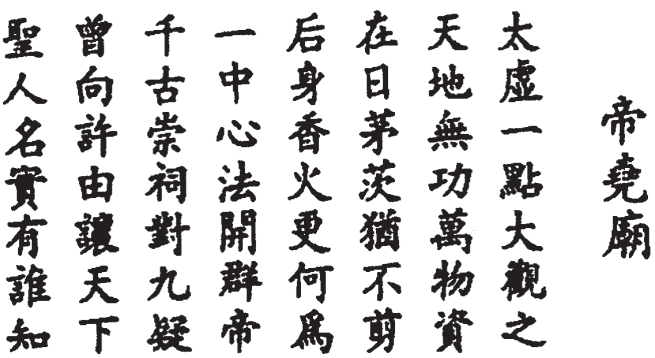
帝堯廟
太虛一點大觀之
天地無功萬物資
在日茅茨猶不剪
后身香火更何爲
一中心法開群帝
千古崇祠對九疑
曾向許由讓天下
聖人名實有誰知

図　帝堯廟の詩

実際、字喃が作られ、それが使われるようになってからも、漢字の影響力が低下したり廃れたりすることはなかった。むしろ、この時期にも漢字は更に多くの場面で使われるようになり、上流階級だけでなく庶民の間にも深く根差し、ベトナムにおける漢字の地位はより強固で揺るがぬものとなった。また、さらに多くの漢字がベトナム語に取り入れられてベトナム語化されたため、ベトナム語における漢字の借字は増加の一途をたどり、着実な発展を遂げた。

阮朝（Nhà Nguyễn　1802～1945）はベトナムの歴史における最後の封建王朝であり、漢学を「国学」とする政治思想体制を敷く最後の王朝でもあった。17世紀から18世紀にかけて、ベトナムの内乱による政情不安から漢学は一時期衰退したが、その後に誕生した阮朝の初期には漢学が大いに栄え、その重要性は著しく増し、漢学とそれに関連する文化や制度も確立されたものとなり、漢学はベトナムにおいてこの時期に黄金期を迎えた。阮朝の開祖である嘉隆帝（Gia Long đế　グェン・フォック・アイン　1802～1819在位）は即位後間もなく、長年に亘る内乱により中断されていた科挙試験の再開に着手し、翌年には郷試を復活させ、一連の政令を公布して科挙制度を甦らせてその制度を確立した。その後の歴代帝王もまた、科挙組織機構の強化と整備に注力し、科挙の開催と進士の採用を短期間で実現した。1822年に明命帝（Minh Mạng　ミン・マン　1820～1840在位）が会試と殿試を再開し、実施頻度を六年ごとから三年ごとに改めたが、それとは別に国の祝典に合わせて不定期に臨時の「恩科」も行った。また、全国各地に科挙の試験場を設けたことで、受験生と合格者の数が大幅に増えた。第四代の嗣德帝（Vua Tự Đức　グェン・フォック・ティー　1848～1883在位）の時代になると、科挙試験は空前の活況を呈した。この時期にはまた、漢字で記された学術的価値のある多くの著作が編纂、出版されたが、代表的なものに歴史著書の『越史通鑑綱目』や『大南実録』、歴史の百科事典的な要素を持つ『歴朝憲章類志』や『大南会典史例』、大型の地理書『大南一統志』などがある。阮朝の時代には漢字学の学舎からも多くの人材が輩出され、名著の収集が行われた。

阮朝後期になるとベトナム封建制度の危機が日増しに高まり、内外の矛盾はより深刻化し、封建社会が繁栄から衰退へと向かうことになるが、そのような時期に危機に乗じてベトナムに乗り込んできたのがフランスの植民地主義者たちである。1858年にフランス政府が宣教師の保護を口実にスペイン艦隊を招集してベトナム中部の峴港（ダナン　Đà Nẵng）を攻撃したことが、フランスの植民地主義者によるベトナム侵略の幕開けとなった。その後、フランスは1859年２月にベトナム南部の嘉定（ザーディン　Gia Định）を占拠し、1884年、ベトナムはフランスの植民地となった。フランスの侵略により、ベトナムの歴史は大きな転換期を迎えることになる。フランスの植民地政策による支配と植民地文化の攻撃を受け、ベトナムの封建制度は加速度的に崩壊し、伝統文化と漢学の地位は厳しい局面に立たされて排斥の憂き目に遭い、滅亡の危機へと向かうことになった。しかし、当時影響力のあったベトナムの愛国志士、呉德継（Ngô Đức Kế　1878～1929）が「我が越南國、千年以来、漢学を学び、孔道に遵ひ、漢文は即ち国文と爲し、孔学は即ち国学と爲す。江山朝代、幾（いくばく）変易するを経ち、危険変乱すること多次と雖も、而れども正学衰えず。人心・風俗・道德・政治、皆此よりて出で、国家種族も亦た此よりて固む。」[10]（『越南詩文合選』第四集、P560）と公言しているように、フランスの植民地主義者たちは、ベトナム征服の過程において、ベトナム人の精神面での激しい抵抗を受けることになる。ベトナムを完全に征服するためには中国の伝統文化の影響を断つ必要があると考えたフランスの植民地主義者たちは、ベトナム占領後、ベトナムの植民地統治における基本方針の一つとしていたある政策、つまり漢字の制限を手始めに、最終的にはベトナムにおける漢学の影響を徹底的に排除するという政策を、着実かつ強固に推進していった。そのためにいくつかの重要な政策が定められたが、当時のフランスの植民地主義者たちがベトナムで推進した一連の政策措置には以下のようなものがあった。

（１）ベトナムを強制的に中国の影響から離脱させる。

（２）漢学出身の士大夫階級を孤立させ、排除する。（19世紀後半の対フランス武力抗争で中心となった人物も多く含む。）

（３）伝統的な科挙制度や教育制度を廃止し、教育に関する権限を植民地政権の管轄とし、西洋の教育を受けたフランスに忠実な現地の役人を養成する。

（４）大部分の伝統文化を排除し、フランスの制度に基づいた植民地文化制度を構築する。

フランスの植民地統治者は、漢学を正当な地位から引きずり下ろすことに力を注いだが、具体的には、文字、教育、科挙、そしてイデオロギーの分野から着手した。

フランスの植民地主義者たちは、ベトナム南部の占領直後から、漢字の使用を取り締まる方法を画策した。1862年にはフランスの初代交趾支那（コーチシナ　Cochinchine française）総督のボナール（鮑那德）がフランスの植民地大臣に書簡で次のような提言を行っている。「進歩とは相いれない漢字を唯一の思想交流の手段として用いていた頃、フランス式の先進的な安南学校のみがローマ文字を漢字の替わりに用いていた。これが転換を促す最も効果的な方法である。」（夏露『浅談法語対越南的影響』、閔惠泉・劉炘炘『国際関係与語言文化』P72、北京広播学院出版社、2003年）その後、フランスの南部植民地政権は政令の公布などの行政措置を講じ、国語ローマ字

（クオックグー　Quốc ngữ ）を定め、フランス語の学校を設立し、国語ローマ字を用いた新聞を発行してそれらを広めようとした。1865年４月１日にベトナム初のローマ字を用いたベトナム語（国語ローマ字）による新聞『嘉定報』（Gia Định Báo）が発行された。ベトナム社会科学センター歴史研究所編纂の『越南大事記 ― 1858～1918』では、1882年に交趾支那総督が、以後全ての公文書はフランス語を使用し、ベトナム語（国語字）の場合にはフランス語訳が必要であるとする規定を定めたとされている。この規定により、まず手始めに交趾支那において、官僚の間から漢字を排除しようとする動きが明確なものとなった。ベトナムがフランスによって植民地化されてから三年目の1887年５月４日にポール・フランソワ・プギニア（Paul François Puginier　皮吉尼爾　1835～1892）主教がフランスの植民地大臣に宛てた手紙には次のように記されている。「まず、『国語』と呼ばれる、ローマ字表記を用いる安南字を漢字の替わりとし……また、早い時期からローマ字で表記されていた彼ら自身の言語で安南人を教育して読み書きができるようにし、数年以内には、公文書での漢字表記を強制的に禁止して自国の言語で記すこととし、全ての公職につく役人はローマ字表記の安南字を習得しなければならないと規定することが可能である。その際にはフランス語教育が効を奏し、その世代の全ての公職につく役人が我々の言語（フランス語）を使うことになるであろう。」（国英『概述法国植民制度下的越南旧漢学』『漢喃雑誌』1987年第１期）このプギニア主教の手紙は、フランスの植民地当局がベトナム全土でローマ字表記のベトナム語とフランス語を浸透させ、早期に漢字に替わるものとすることを提案するものである。

20世紀の初めには、漢学はベトナムにおいて元来の正統な地位を完全に失い、同時にベトナムの政治、文化、教育、言語および行政などの領域から排除された。しかし、漢学は千年以上の長きに亘りベトナムに存在しており、すでに社会生活の中に広く浸透し、その影響はベトナムの文化風俗、道徳観念、思考様式および民族精神にも及んでいたため、フランスの植民地主義者がこれらすべてを取り除くことはそもそも不可能であった。

当時のベトナムでは、ベトナム語、漢語、フランス語の三つの言語と、漢字、字喃、国語字、フランス語文字の四つの文字が使われていた。フランスの植民地統治者は、ベトナム人が学校でフランス語を学び、政府機関ではフランス語を使用しなければならないと定め、フランス語を植民地の各行政機関における正式な行政用の文字としていた。そのため、ベトナム語には多くのフランス語が外来語として取り入れられており、科学技術、医薬、武器、楽器などを中心に、衣食など生活に関連する語彙も見られる。

国語字とは、本来はベトナムの字喃を指すものであり、外来語の漢字と区別するための呼び名であった。その後、ローマ字表記のベトナム表音文字が作られると、表音文字がローマ字化国語字と呼ばれるようになり、現在のベトナムで使われている正式な国字となった。これらの文字はヨーロッパの宣教師がベトナムで布教活動を行った際の副産物であったが、制定されてから今日まで約400年の歴史がある。15世紀の終わりごろにはすでにフランス人宣教師がインドシナ半島で布教活動を行っていたという記録が残されており、それに続いてポルトガル、イタリア、フランス、スペインなどの国々の宣教師たちも相次いでベトナムに渡り、布教活動を行った。当時、

すでに民間での布教のために、現地の言葉の読み方をローマ字で表記する試みが行われていた。現存する資料には、1615年にはポルトガルの宣教師がローマ字表記のベトナム語を用いた文章で布教活動を行っていたと記されている。（ベトナム社会科学センター歴史研究所編『越南大事記—起源から1858年まで』越南教育出版社、2002年、P284）その後ベトナムにやって来た宣教師たちも先人に倣い、表音文字を使った布教活動に改良を重ねたことから、布教活動を通じて、現地の言葉のローマ字表記はより完全なものへと発展を続けた。つまり、ベトナムにおけるローマ字表記の文字は、ヨーロッパの宣教師たちが主導的な役割を果たして作り上げた集大成であると言うことができる。これらの宣教師の中には、ローマ字表記文字の作成に特に大きく貢献した者たちも少なからずいる。これについて当時は様々な意見があったが、最も影響力と権威があったとされ、取り上げられることも多いのが、1651年にローマで出版されたフランス人宣教師のアレクサンダ・ド・ロード（Alexander de Rhodes　亜歴山大・德・羅德　1593～1660）による二冊の重要な著書『越南語—葡萄牙—拉丁字典』と『八日教程』である。このことから、ド・ロードはベトナムのローマ字表記文字の始祖とされている。これらの二冊の著書は優れた学術的価値と実用性を持ち、特に宗教界で高く評価されている。17世紀にベトナム教会がベトナム語のために作り出したローマ字表記文字は、このド・ロードによる字典を重要な拠り所としたものである。しかしながら、当時はこれらの表音文字は教会と信者間のみで使われていたに過ぎず、字喃に精通していたベトナム人信者たちは、これらのローマ字表記は西洋風に書かれたベトナムの書き言葉であると捉え、「西国文」と呼び、「国語字」の字喃と区別していた。フランスの植民地政府は、これらのローマ字化したベトナムの書き言葉を西洋文字と同等のものであると見なし、これらの文字の学習と伝播を強制し、ベトナムでフランス語を普及させて漢字排斥をスムーズに行うための足掛かりにしようとした。また、「国語字」という用語は、ローマ字による表音文字を指す言葉としてベトナムで徐々に広まり、人々にも受け入れられるようになっていった。ベトナムがフランスの属国であった時代、植民者たちが大いに国語字を広めようとしたが、当時の社会情勢と条件面での制約から、植民地行政機関と特定の学校のみで使われていたに過ぎず、広く普及するには至らなかった。一方でローマ字表記による国語字は日増しに洗練されたものとなり、抗仏闘争の時期には、革命の宣揚や抗仏闘争の呼び掛けの有力な道具としても使われた。

阮王朝からは常に軽視され、絶えずフランスの植民地統治者による抑圧と排斥の憂き目に遭っていた字喃は、その後もわずかに民間で細々と使われていたが、やがて19世紀末に国語字が字喃に替わる文字になると、見捨てられて不要なものとなった。

一方で、漢字は阮王朝時代にも常に全国共通の文字であり続けた。フランスによるベトナム征服以降、漢字を排除して別の文字にその役割を担わせようとしたが、その当時は国語字がまだ十分に成熟しておらず、また、愛国心の強い知識人と多くの市民が長期に亘りフランス語とその文字に抵抗を示していたため、国語字が漢字の役割と地位を奪うには至らなかった。ベトナムでは漢学が衰退の一途を辿り、フランスの植民地統治者はフランス語の文字を漢字の替わりとする政策を強引に定めたが、その後も、ベトナムの知識人や民衆は漢字こそが伝統的な文字であると考

え、愛国心を歌った多くの詩文を漢字で記し、愛国思想や抗仏闘争のための道具として漢字を利用し続けた。初期のベトナムの民族主義運動の重要人物である潘佩珠（Phan Bôi Châu　ファン・ボイ・チャウ　1867～1940）は漢学に造形が深い儒家であったが、維新変革を唱え、1905年に「東遊運動」（Phong trào Đông Du）を興し、愛国愛民の真理を求めた人物でもある。彼は著書の中で愛国精神を広く世に示し、またフランス植民地統治者の罪を暴き、「フランス賊軍を駆逐し、ベトナムを取り戻す」というスローガンを掲げた。漢文で記された彼の主な著作には自伝の『自判』のほか、『法越定型政見書』、『獄中書』、『越南国史学』、『越南亡国史』、『范鴻泰傳』などがある。また他にも、『海外血涙書』や『続海外血涙書』、『新越南』などの海外での亡命生活について記した著書だけでなく、フランスのベトナム植民地統治を告発して批判したものや、ベトナムについて喧伝した多くの書物や手紙を残している。これらの漢字で書かれた潘佩珠の書物や手紙はいずれも、当時のベトナムの政局や民衆に大きな影響を与えた。八月革命以前、フランスの植民地統治に抵抗し民族独立奪回の闘争を推し進める中で、民衆による革命組織の各派は、習得が容易で使いやすいローマ字表記の国語字を重視し、それを積極的に広めた。そのため、ローマ字表記の国語字が民衆の間に浸透し、民衆の団結を促して抗戦を繰り広げるための強力な武器となった。同時に、彼らは、ベトナムの政治舞台から革命を広く知らしめるためには、依然として漢字が不可欠で重要な補助手段であるとも考えていた。ベトナム民主共和国の建国者である胡志明（Hồ Chí Minh　ホー・チ・ミン　1890～1969）は中国国民党によって逮捕され、1942年８月から1943年９月まで中国の広西で拘禁されたが、投獄期間中、唐代の七言絶句の様式に倣い漢字で詩集『獄中日記』を記した。この詩集は革命の志を抱き邁進する作者の気持ちを詩を通じて歌い上げたものであり、八月革命前夜のベトナムの革命者が、屈辱に耐え、重責を担いながらも民族独立の自由を願い求める毅然たる意志を持ち、同志の揺るぎない信念を奮い立たせ、戦いを続けて勝利を手に入れようとする姿を映し出したものである。135編の詩が収められたこの詩集は1960年に越南教育出版社から出版され、1996年までに四度の再版を重ねたが、今もこの詩集を買い求める者が後を絶たない。

1945年２月２日にホー・チ・ミン主席がハノイのバーディン広場（Quang Truong Ba Dinh）で「独立宣言」（Tuyên ngôn Độc lập）を読み上げ、ベトナム民主共和国の誕生を宣言した。この「独立宣言」はローマ字表記の国語字で書かれたものであり、まぎれもなく、ローマ字表記の国語字がベトナム国家における正式な文字となったことを海外に宣告したものでもある。その後、ベトナム政府は北部で識字教育の取り組みを行い、ローマ字表記の国語字使用を強制的に推進し、普及させた。1976年７月２日にベトナムの南北統一が実現すると、文字も全国で統一された。この時、ローマ字表記の国語字が完全に漢字に替わるものとなり、名実ともにベトナムで唯一の公式文字となった。

すでにベトナムにおいてかつての正当な文字としての地位からは退いているものの、漢字はベトナム社会の発展に大いに貢献してきた。ベトナムには膨大な漢字の文献の蔵書があるが、その内容はベトナムの政治、経済、文化、教育、科学技術から風土人情、民族習慣に至るまで多岐に

亘り、二千年以上に及ぶベトナムの文明史を支え、ベトナム伝統文化を構成する重要な要素となっている。いまなお漢字はベトナム社会と密接な関係にあり、現代ベトナム語のみならず、ベトナム社会の各方面に大きな影響を与え続けている。現代ベトナム語の根底には膨大な漢字の語彙構成要素が存在し、今日でも新語を創るにあたり、漢字は変わらず不可欠な要素となっている。

訳注

1）本翻訳は2010年に人民教育出版社より出版された何九盈・胡双宝・張猛ほか編『漢字文化大観』の第16章 第3節を翻訳し、解題等を加えたものである。『漢字文化大観』の日本語訳は、2024年1月以降に樹立社から出版見込みである。なお、本翻訳にあたり京都外国語大学の苗芡氏と推敲を重ねた。

2）第16章　第3節の著者は馬克承氏である。

3）本翻訳において、古典の読み下し文の検索および作成は北海道大学文学院　中国文化論研究室博士後期課程在学中の莫寒氏に依頼した。この読み下し文は莫氏によるものである。

4）『墨子』「節用」からの引用。新釈漢文大系『墨子』山田琢著　東京：明治書院，1975-1987

5）『韓非子』「十過」からの引用。新釈漢文大系『韓非子』竹内照夫著　東京：明治書院，1960-1964

6）新釈漢文大系『史記』吉田賢抗著　東京：明治書院，1973-2014

7）本翻訳ではベトナム人やベトナムの地名にはベトナム語表記を付した。ベトナム語表記は『ベトナム人名事典』を参照したほか、本に記載されていない人物などについてチュオン・キム・マイ氏に確認を依頼した。

8）この読み下し文は莫氏によるものである。
訳文参考：https://shudo-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=3322&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1

9）この読み下し文は莫氏によるものである。
訳文参考：『全譯後漢書』渡邉義浩 ほか 編　東京：汲古書院，2001.1

10）この読み下し文は莫氏によるものである。

11）呉朝が滅んだ年代について諸説あるが、ここではオンライン版『日本大百科全書（ニッポニカ）』（小学館）の「呉朝」の項目に記載されている年代を採用した。

参考文献

西川寛生著　『ベトナム人名事典』　暁印書館　2000年
アンドレ・マソン著　杉辺利英・根本長兵衛共訳『ヴェトナム史』　白水社　1969年
小倉貞男著『物語ヴェトナムの歴史』　中央公論新社　1997年

本稿は樹立社による『漢字文化大観』日本語訳（2024年1月以降出版見込み）で、筆者が担当した翻訳箇所に解題等を書き加えたものである。